

多くの研究場を経験した一分子生物学研究者のひとこと

町田千代子 (中部大学大学院 応用生物学研究科 教授)

仕事の内容とやりがい

私立大学の生物学関連の学部の教授をしています。研究と教育の両方をこなさなければならぬ職です。研究の分野で最先端の研究を維持することはとても大変ですが、ポストドク、大学院生、学部4年生と共に研究の楽しさを共有できることは大変うれしいことです。

仕事と家庭とのバランス

現在、2人の子(大学生と大学院生)の母親です。育児中とその後は、論文の数が少なくなっていますので、時間の制約が多く、研究に費やせる時間が少なかったのだと思います。子供が小さい時には、非常勤の研究員、さきがけ研究者等のより自由度の高い職について、自分の研究に集中できましたので、ストレスを感じることはありませんでした。国立大学の教官を経て、51歳の時に私立大学の新設の応用生物学部の教授の職につき、初めて、独立した、自分の研究室をもつことができました。しかし、教育も含めて、研究以外の多くのことをこなさなければならない職です。家庭とのバランスは、今でも課題ですが、仕事も家庭も合理的に、まわりの助けを得られるようにするのがいいと思います。

進路決定のきっかけ

中学、高校においては、理系に進むことは、当然と考えていました。高校の時に、分子生物学の新しい潮流があることを知り(1960年代です)、大学では、化学科の中にある生化学を学ぶことが重要であると思い、当時は数少ない、生化学教室のある千葉大学理学部化学科に進学しました。卒業後は、県の公務員試験にも合格していましたが、その時に新しく設立された三菱化成生命科学研究科(会社100%出資の基礎の研究所)に職を得ることができましたので、研究所を選びました。7年後、退職し、夫と共に米国に留学し、約3年間の米国での研究成果で、博士の学位を取りました。岐路に立った時の判断基準は、常に、「おもしろそうな道を選ぶこと」でした。

進路選択に対するメッセージ

やりたいことをいつも、明確にして、進んで下さい。やりたいことに向かって努力すると、自然にまわりも助けてくれるかもしれません。また、研究者をめざしている人は、早い時期に、海外経験をすることをお勧めします。視野が広がることは、その後の人生の歩みを変えるかもしれません。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

私が留学した大学の近くある、Cold Spring Harbor研究所(当時はワトソンが研究所長。マクリントックがいました)は、毎年、初夏にその時々トピックスをとりあげて、世界中からトップの研究者が集まるシンポジウムが開かれる場所です。1980年の「動く遺伝因子」のシンポジウムに参加させてもらうことができ、大きな刺激を受けました。何よりも、広い視野を持ち、何が最も重要かという視点をもちつづけること(未だに私は到達できていないのですが…)、サイエンスでは、学生も教授も皆同じ、自由な雰囲気が必要であることを学びました。今、自分の研究室をもって、この2点が最大の成果と思っています。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

私が海外(米国)で研究したのは1980年代初めです。その頃は、まだ、米国でも女性研究者が少なかったためマイノリティの考え方によって、ある比率で女性研究者を採用する制度がありました。私が所属していたDepartmentには、2名の女性のAssistant Professorがいましたが、非常に優れた活発な研究者で、Department全体に及ぼす影響の強さを感じました。30年前のことですが、今の日本よりもずっと進んでいたと思います。日本はまだまだですね。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

きっかけですが、あまり志高いわけではなく、夫がポストドクとして米国に行くことになり、一度は留学したいと思っていたので、よいチャンスと思ったのが正直なところです。それまでの職を辞めて渡米、立場はResearch Assistantです。米国では、大坪栄一先生、久子先生の研究室で研究し、研究テーマにも恵まれました。約3年後、夫に日本での職のオファーがあり帰国しました。私には職はなかった(ポストドク制度がなかったのでパートタイムでした)のですが、米国での研究は、10年後に、「さきがけ研究21」に採用されたテーマにもつながっており、短期的ではなく、少し長い目で見えることも重要だと思います。

滞在先の思い出・生活者としての体験

私が留学していたニューヨーク州立大学・ストニーブルック校は、NY cityのあるマンハッタンから車で約1時間のロングアイランド島にあり、NY cityに住む人たちのSecond Houseがあるようなきれいな大学町でした。アメリカ人の学生に加えて海外からのポストドク等、多くの知り合いができました。異文化にふれることは重要です。特に若い時は大きな影響を受けるでしょう。何よりも世界中に友人ができたことは財産です。



<町田千代子(まちだちよこ)プロフィール>

1972年千葉大学理学部化学科卒、1972~1979年三菱化成生命科学研究科、研究技術員、1979~1982年米国ニューヨーク州立大学ストニーブルック校医学部微生物学科学研究技術員、1982~1984年農水省の研究所(非常勤)、1984年第一子出産、1985年農学博士(東京大学)、1984~1991年名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻研究員(非常勤)、1989年第二子出産、1992~1994年新技術事業団さきがけ研究21「細胞と情報」領域研究者、1996~1999年キリンビール(株)基盤技術研究所研究員、1999~2001年名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻講師、2001年中部大学応用生物学部教授